翻刻『源氏物語古註』（三十八）――すゞむし――

（山口県文書館蔵　右田毛利家伝来細川幽斎自筆本）

熊本守雄
Morio KUMAMOTO

凡例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽斎自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽斎が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成により攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「すゞむし」一帖を翻刻したものである。

二、「すゞむし」一帖は、二括より成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で二括りある。

第一括　料紙四枚八葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は七丁）

第二括　料紙三枚六葉（その内、端一丁は後表紙の見返しとして使われており、墨付は五丁）

料紙十四葉の内、墨付は十二丁、二十四面に及んでいる。

三、「すゞむし」一帖の翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1　注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「　」を付し、示した。

2　原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3　原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに〈1オ〉〈1ウ〉〈2オ〉〈2ウ〉などの記号をつけた。

4　原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、㈠と、かっこを付して示した。

5　現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6　本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所

等には、（マヽ）と記した。

○　資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「すゞむし」、うたをもて、まきのなとす。源氏五十歳、夏秋事、堅ならびなり。

一、「なつごろ、はちすの花のさかりに、入道のひめ」とハ、女三の宮の御持佛どもあらハし給ふ也。そのくやうし給へる也。

一、「此のたびハおとゞのきミの」とハ、源氏の、御心ざしにて、御ねんずだうのぐども、こまかにとゝのへさせ給へるを、やがて「しつらハせ給ふ」とは、だうをかざり給へる也。ねんずだうも、持佛だうおなじ也。

一、「はたのさま」とハ、だうのかざりのはた、けまんなど也。からにしきにて、ぬハせ給へる也。むらさきのうへ、ぬハさせ給へる也。

一、「花づくゑのおほひ」とハ、けんもんしやにてせさせ給ふ、花をたむけ給ふつくゑ也。「おほひ」ハ、うちしき也。「おかしきめぞめ」とは、くゝりぞめ也。「めなれぬ」とは、つねにみえぬさまなり。〈1オ〉

一、「よるのミちやうのかたびら、よおもてながら」とハ、四方ともあげて、うしろのかたにハほつけのまんだらかけ奉りたる也。

一、「ことぐしき花の色」とは、れんげ也。つくりばななり。

一、ミやうかうにハ、からの百ぶのくのえかう、くんゑかうもむかしハからのほうをもちいたる也。「ミやうかう」とハ、めいかう也。名香也。

一、「あミだぼとけ、きうしのぼさち」ハ、観音・勢至也。「けうし」ハ、脇士也。無量寿佛住立空中、観世音大勢至是二大士侍立左右。

一、「びやくだんして」、白檀にてつくれる也。

一、「あかのぐハ、きハやかに」とは、花さらできわよきの心也。

一、「あをきしろき」とハ、五色のはちすをつくりて、花さらにそへたる也。名香にも荷葉のほうをあハせたるたき物、たき給へる也。かうハ、はちすのは也。「みちをかくしほろゝげて」とハ、蜜をいれずし〈1ウ〉て、あハせたるたき物也。ミつハ、けがれあるゆへにのぞく也。

一、「ひとつかほりに」とハ、いけのはちすと、かえうあハせたるたき物、かほりあひたる也。

一、きやうハ、六道の衆生のため也。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のため也。又、六波羅蜜のため也。「ミづからの御持經」とハ、女三のミやのふだんあそばすべき御きやうハ、源氏御てづからかゝせ給へる也。

一、「これをだに」とハ、此きやうをだに結縁にて、たがひにのちの世ハミちびきかハし給へと也。「かたミ」ハ、たがひに也。

一、「かん屋の人」とハ、かミすきに、おほせつけられて、すかせ給へる也。

一、「けかけたるかね」とハ、竪横のけかけたる黄金のかゞやくよりも、すミつきのひかりあると也。

一、「ぢんのけそく」とハ、沈香の木にてつくれるつくゑにすへたる也。「け〈2オ〉そく」とハ、花をほりつけたるつくゑ也。「みちやうだいのうへに」とは、つぼの御帳臺のうへに、きやうほとけ安置し奉る也。

一、「かうしまうのぼり」とハ、ろんぎの講師也。「ぎやうかうの人〻」とは、手かうろもちたる人也。僧にかぎらず、てかうろもちて、行道する人を、行香の人といへる也。「院もあなたにいで給ふとて」とハ、源氏女三（マヽ、「宮」脱カ）のおハしますにしのひさしにのぞき給へれば、せばき

心ちするおましに、こと〳〵しくさうぞくしたる女ばう、つどひあつまりたる也。

一、「ひとりどもして」とハ、かうろあまたして、けぶたきまであふぎちらせば、源氏より給て、そらにたくかうハ、いづくのにほひぞとおもふやうなるこそよけれ。ふじのねのけぶりほどくゆりみちたるハ、ほいなき事といさめ給ふ也。「かうせち」とハ、ろんぎの時は、なりをしづめて、ほうもんの心きゝわくべきやうを、〻しへ給ふ也。きぬのをとなひ、人のけハひも、〈2ウ〉しづめてよかるべきと源氏の給ふ也。

一、「宮は人げにをされて」とハ、女三の宮ハ、いとゞちいさくて、ひれふしておハします也。「わかぎミ」とハ、かほる、みだりがハしく、はしりありき給ふべし。ゐだきかくし奉れと、源氏の給ふ也。「宮にも」とハ、女三の宮に、ほうもんきゝわけ給ふべきした心などをしへ給ふ也。あハれに源氏ミ給ふ也。

一、「おましをゆづり給ふ」とハ、女三の宮のつねの御帳だいを佛前にかざりなしたるさま、あハれかぎりなき也。

一、「かゝるかたのいとなミを、もろともに」とハ、源氏佛道修行もし給ハんに、ことハりの御よハひなるを、女三の宮のさきだちて、かやうにほとけのいとなミし給はんとハ思ひよらぬ、と源氏あハれにおぼす也。

一、「よし、（マヽ、「の」脱）のちよだに、かの花のなかの」とハ、おなじはちすにむまれあはんと女三の宮おぼせ、と源氏の給ふて、うちなき給ふ。〈3オ〉

一、「はちすばをおなじうてなとちぎりをきて露のわかるゝけふぞかなしき」、（マヽ、「の」カ）のちをよをちぎりをきながら、此よは露ばかりのたのミにて、けふわかれはつるがゝなしき、と源氏よミ給へる也。「かうぞめのあふぎ」とは、かう色のあふぎ也。

一、「へだてなくはちすのやどをちぎりてもきミが心やすまじとすらん」、へだてなく、ことばにはおなじはちすとちぎり給ふとも、心ハおなじやどに源氏すまじとおぼすらん、と女三の宮述懐也。「かきそへ」とハ、あふぎにかきそへ給へる也。

一、「いふかひなくも」とハ、女三の宮かひなくもおぼしくたすと、源氏の給て、あハれとハおぼしたる也。「御かた〴〵よりも」とハ、源氏のおもひ人たちの、われも〳〵といとミ（マヽ）いでゝほうもつまいらせ給へる也。

一、「七僧のほうぶく」とハ、七人の僧たちのさうぞく也。講師、讀師、呪〈3ウ〉願、三礼、唄師、散花、堂達、七そう也。此さうぞくなどハむらさきのうへせさせ給ふ也。「むつかしう」、記者也。

一、「ながきよゝに」とハ、生〻世〻佛縁たゆまじきと、ほけきやうにむすぶ心をろんぎにしける也。「ゆたけき」とハ、廣智なる心也。「さきら」ハ、弁舌きゝたる心也。

一、「うちにも山のみかども」とハ、今上も朱雀院よりも、みな御つかひどもあり。御ずきやうありければ、所せくなれる也。

一、「院にまうけさせ給ける」とハ、源氏のとゝのへ給たる事だにあるいミじき事になりたると也。「そぐ」とハ、のぞく也。「夕のてらに」とハ、僧のかへる夕のてらに、をき所なきまでになんありける。

一、「いましも心ぐるしき」とハ、女三の宮あまになり給てのちに、かぎりなくかしづき給へる也。〈4オ〉

一、「院のみかどは」とハ、朱雀院ハ、此せうぶんの宮に女三の宮すミはなれ給ハんやうにとおぼす也。「せうぶん」とハ、所わけ也。所分と書也。これは、古院より給ハり給へる宮也。「よそ〳〵にてハ」とは、おぼつかなからん。あけくれ見奉りてきこえうけ給ハらんこそほいならめ。ありはてぬよいくばくあるまじけれど、いけるかぎりハ心ざしうしなひはてぬやうにと源氏の給ふ也。引哥、ありはてぬいのちまつまのほどばかりうき事しげくおもハすもかな。「かの宮を

も」とハ、三条の宮をも、こまかにきよらに源氏つくらせ給ふ也。
一、「ミふの物ども、くに〳〵のミさう、みまき」とハ、朱雀院のミふに給ハらせ給へる物、又くに〳〵の御領地（りやうち）の物ども、みな三条の宮におさめさせ給て、女三の宮にゆづり給へる也。「院の御せうぶんに」とは、古院より朱雀院給ハり給たる御たから物、みな女三の宮に奉り給へる也。〈4ウ〉
一、「そこらの女房の事ども、かみしものはぐゝみ」とハ、三の宮にある女房などのあつかひ、をしなべて源氏のあつかひにて、つかうまつらせ給ふ也。
一、あきごろ、にしのわたとのゝまへ、ひんがしのきハを、のにつくらせ給へり。あかのたなどして、をこなひのかたにしなせ給へる、なまめきたる也。
一、「御でしに」とは、女三の御（マヽ、「宮」脱）ともにしたひてなりたるあまども、わかくさかりのも、心さだまり、あまにても、よをつくしつべきハ、えりいでゝなさせ給へる也。
一、「さるきほひに」とハ、あまにならんといふ女房きほひ、きしろひけれど、源氏きゝ給て、あるまじき事也。心まことならぬ人あれば、かたへの人、あはく〳〵しうなる物ぞといさめ給て、十よ人ばかりあまにてあると也。「きほひきしろひ」とハ、あらそひさハぎたる也。
一、「このゝに」とは、女三の宮の御かたの野（の）にはなたせ給へる。むしのねきゝ給はんとて、源氏わたり給て、女三の宮に思ひはなれぬさ〈5オ〉まをいひなやまし給へれど、あるまじき事にこそと、ひとへにむつかしき事に思ひきこえ給へる也。人めにこそ源氏かハる事なくもてなし給しか、心のうちにハうきをしり給へるけしきしるく、かハり給へる心を、いかでみえたてまつらじとふかくおぼして、おほくハあまになり給たれば、いまハもてはなれ心やすきに、なをかやうにけさう心をの給ふを、女三の宮くるしうて、人ばなれたらん御すまひに、うつろひにしかなとおぼせど、をよずけてさもしゐての給ハぬなり。
一、「十五夜の月のまだかげかくしたるほどに」とハ、八月十五夜の月まだいでやらぬ夕暮（くれ）に、女三の宮ほとけのおまへにおハして、はしちかくねんずしておハする。「あかたて奉るとてならすあかづきのをと」ゝハ、花さらすゝくをときこゆ。さまかハりたるをんなの〈5ウ〉御すまひひきかへて、をこなひのミちに入給へるに、あかのミづそゝきあへる、あハれなる也。「れいのわたり給て」とは、源氏おハしまして、むしのねしげくみだるゝ夕かなとて、しのびやかに、あミだの大しゆ、うちずんじて、入給ふ、たうとくきこゆ。こゑ〳〵聞えたる中に、すゞむしのふりいで（マヽ、「たる」脱）ほど、花やかなると源氏の給ふ也。松（まつ）むしすぐれたるとて、中宮の、はるけき野べをわけて、わざとたづねとりつゝはなたせ給へる、それとしるくなきいづるこそすくなけれ、などの給ふ也。「名（な）にハたがひて」とハ、松（まつ）むしといへども、いのちはかなきむしと也。心にまかせて、人きかぬ野べにはなけども、人けちかくハなかぬハへだて心あるむしなりとの給ふ也。すゞむしハ心やすく、いまめきたるこゑこそらうたけれなど源氏の給へば、女三の宮よミ給ふ。
(一)、「大かたのあきをばうしとしりにしをふりすてがたきすゞむしのこゑ」〈6オ〉大かたあき給たる身をうしし（マヽ、「と」脱）りながら、源氏をふりすてがたく御こゑをきくと、すゞむしを源氏にあてゝ、すてがたきとよミ給ふ也。あてにおほどかなり。いかにとかや、わがあきたるとハ、おもひのほかなる御事をの給ふと、源氏の給ふ也。源氏よミ給ふ。
(一)、「心もてくさのやどりハいとへどもなをすゞむしのこゑぞふりせぬ」、女三の宮、心とよをいとひ給へど、「なをふりせぬ」とハ、わかやかなるの心也。きんの御ことをめしいでゝ、めづらしくひき給ふ。女三の宮、御ずゞひきをこたりて、きんのことに心いれてきゝ

給ふ也。月さしいで給へば、源氏うちながめ給て、よの中のかハりゆくありさま、おぼしつゞけて、あはれなるねにかきならし給ふ。

一、「こよひハれいの御あそびにや」とハ、源氏、れいの月のえんし給ふらんとをしはかり給て、兵部卿宮わたり給へり。大将のきミも、てん上〈6ウ〉人のさるべきなどぐしてまいり給へば、女三の宮の御かたにわたり給ふと、きんのことのねをたづねて、まいり給ふ。ひさしくたえたるめづらしき物のね、きかまほしかりつるに、いとようおハしましたるとて、兵部卿の宮も、こなたにおましよそひていれ奉り給ふ也。

一、「うちのおまへに」とハ、きんちうに月のえんあるべきとありしを、とまりてさうゞ〳〵しかりつるに、六条院に人〻まいり給ふ、とき〻つたへて、これかれまいり給へり。むしのねのさだめをし給ふ。御ことかきあハせ、おもしろきほどに、いつとても月みるよひのあハれならぬハなき中に、「こよひあらたなる」引、三五夜中新月色、二千里外古人心。「わがよのほか」とハ、もろこしまでおもひやらるゝと也。

一、「こ権大納言」とハ、かしハ木の、なきにつけてしのばるゝことおほく、物のおりふしのにほひうせたる心ちこそすれ、との給ひいで〻、かき〈7オ〉ならし給ふことのねにも、源氏おとし給ふ。ミすのうちにも、みゝとゞめ給ふてやきゝ給ふらんと、女三の宮の御心をしはかり給ふ也。かゝる御あそびにハ、まづかしハ木戀しく内などにもおぼしいでける。

一、「こよひハすゞむしのえん」とハ、むしのねめでゝあかさんとおぼす也。「えん」とハ、さかもり也。御かハらけふたわたりばかりまいるほどに、冷泉院より御せうそこあり。御前の御あそびにわかにとまりて、くちをしがり、左大弁、式部大輔、又人〻まいりたるに、大将などハ、六条院にさぶらひ給ふときこしめしてなりけり。

一、「くものうへをかけはなれたるすミかにも物わすれせぬ秋のよの月」、きんちうすミはなれ給たるすミかにも、こよひの月の哀ハわすられぬと也。「おなじくハ」、引哥、あたら夜の月と花とをおなじくハあハれしれらん人にミせばや。〈7ウ〉

一、「なにばかりの所せき」とハ、こと〴〵しくおもふべき身ならねども、と源氏卑下のことば也。身の自由ならぬまゝに、院参申さぬを、ほいなくおぼしめしてをどろかさせ給へる、かたじけなしとて、

一、「月かげハおなじくもゐにみえながらわがやどからの秋ぞかハれる」、冷泉院ハ御在位におなじくみえさせ給ふ。わがやどのあきこそさびしけれと也。「ことなる事なかめる」とハ、冷泉院、みかどにておハしましし時に、ことにかハる事なけれど、たゞむかしいまの御ありさまの、おぼしつゞけられて哀なれば、御せうそこありけるにやと也。

一、「御つかひに」、勅使に、さかづきさして、ろくになきと也。

一、「院の御車に」とハ、源氏の御くるまに、兵部卿の宮奉り給ふ也。「大将」ハ、夕ぎり、「左衛門督」ハ、内府舎弟、「藤宰相」ハ、かしハ木のおとうと。

一、「したがさねばかり」とハ、源氏ハなをしにしたがさねばかりそへ給たる也。〈8オ〉

一、「うるハしきおりふしハ」とハ、冷泉院御在位の時は、じちめやかにて御たいめんありしに、いまハ又しのびやかに源氏にもてなし給へる也。

一、「よだけき」とハ、よにこと〴〵しきさまをつくして、院も源氏も御参會ありしに、いまハしのびやかなる也。「いにしへのたゞ人ざま」とハ、源氏むかしの臣下におなじくふるまひ給ふ也。

一、「いといたうをどろき」とハ、冷泉院、めづらしくおぼして、たいめんある也。

一、「ねびとゝのひ」とは、冷泉院ハ、卅三歳にておハします也。夕ぎりハ、三十になり給へる也。「こと物ならず」とは、いよ（ママ、「く」脱カ）源氏に冷泉院おなじひかりとみえ給へる也。さかりの御よを、冷泉院心とすてさせ給へるありさま、あハれに源氏おぼさるゝ也。

一、「その夜のうたども」、記者（きしゃ）也。

一、「六条院ハ、中宮の御かたに」とは、源氏ハ、あきこのむ中宮の御かたに〈8ウ〉わたり給て、御物がたりし給ふ也。いまハかうしづかなるすまひそへて、わすれぬむかしの御物がたりも、うけ給ハらまほしうおもへども、「なにゝつかぬ」とハ、臣下ともなく、又大上天皇のくらゐとも、身のもてなしやすからで、中宮にもたいめんうゐ〳〵しくなりにたると也。「うゐうゐしき」とハ、はじめゝきたると也。

一、「われよりのちの人〻に」とハ、遁世（とんせい）をわかき人にさへをくれゆく心ちして、心ぼそくよに心とめがたければ、世はれ（ママ、「な」脱）たるすまひに、やう〳〵おもひたち侍る、と源氏の給ふ也。「のこりの人〻」とハ、女御むらさきのうへなどに心よせ給ひ、たゞよハし給ふな、と中宮にの給ふ也。

一、「れいのいとわかう」とハ、中宮、わかくおほとかにみえ給ふと也。

一、「こゝのへのへだてふかう」とハ、きんちうにおハしましたるとしごろよりも、うと〳〵しくなりにけると中宮の給ふ也。「思ひのほかに」とハ、みかど〈9オ〉おりゐさせ給て、身のもてなしむつかしうて、みな人のそむきゆくよを、いとハしう思ひなる事も侍ながら、その心のうちを聞えさせうけ給ハらねば、おぼつかなきと中宮の給ふ也。「みな人のそむき」、引哥、みな人のそむきはてぬるよの中にふるのやしろの身をいかゞせん。なに事もまづたのもしかげ（ママ、「き」脱）にハ、源氏を聞えならひ侍て、いぶせくと中宮の給ふは、源氏に何事もおほせあハせらるべきを、遁世の事ハいかゞと心もとなきと也。「いぶせき」ハ、心もとなき也。

一、「おほやけざまにて」とハ、禁中におハしましし時ハ、中宮里ゐもし給ひつるに、いまハなに事につけて、御心にまかせて、六条院に御うつろひも侍らんと、源氏の給ひて、さだめなきよといひながら、さしていとハしき事のなき人の、さハやかによをそむくハありがたきなり、心やすかるべきほどにつけてだに、思ひすてぬわざ也。〈9ウ〉などてかその人まねにきほふ御道心ハ、つかせ給ふらん。かへりてハひがひがしきやうにいひなす人もこそ侍れ。あるじきこと（ママ、「ま」脱）ゝ源氏の給ふ也。

一、「ふかうしも」とハ、わが遁世（とんせい）を源氏いひとゞめ給ふハ、心をくミはかりたまハぬにこそ、と中宮つらうおぼす也。心くむと組（くミ）あハするをいふ也。

一、ミやす所の、御身のくるしうなり給ふらん。「なきあとにても、人にうと（ママ、「まれ」脱）侍れ」とハ、ミやす所人おちられ給ふといふ事、源ハ（ママ、「氏」脱）かくし給へども、中宮ハ人のくちさがなくて、きゝつたへ給けるのち、道心もつき給へる也。むらさきのうへに御息所つき給て、名（な）のり給ひし事を中宮きこしめしける也。「かのの給ひけん」とハ、ミやす所、れいこんのの給ひけんさまを、きかまほしきに、まほにハ源氏にの給ハで、たゞ、なき人の御ありさまの、つミかろからぬさまにほのきく事侍るをなどの給ふ也。

一、「をくれしほどの」とハ、御息所にをくれ給ひしあハればかりをわすれず〈10オ〉「物のあなた」とハ、のちのことを思ひやらざりけるは、はかなき、と中宮の給ふ也。いかで、ようのちのよのすゝめをもきゝ侍て、ミづからだにかのミやす所のほのほをもさましてしがなと、やう〳〵としつもるに、思ひしらるゝ事もありけると、かすめつゝぞ中宮源氏にの給ける。

一、げにさもおぼしぬべき事と、あハれに源氏見奉り給て、そのほのほハ、たれものがれがたき事としりながら、「あさ露のかゝれるほどハ、」とは、いのちのかゝれるほどは、身をすて侍らぬに、「もくれんが、ほとけにちかきひじりの身にて、たちまちにすくひけん」とは、目蓮尊者の母を地獄、俄鬼、畜生道より天上にたちまちみちきたるやうにハ、中宮ミやす所をみちき給ハざらん物ゆへに、玉のかんざしすてさせ給はんも、此よにハうらみのこるやうならん、とげんじ〈10ウ〉

一、「あさ露のかゝれる」、引、亦如朝露、勢不久停。

一、「やう〳〵さる心ざしを」とハ、道心をおぼしめししめて、かのミやす所のけぶりはるくべきことをせさせ給へ、と源氏の給ふ也。

一、「しかおもふ給ふ事」とハ、かうわれも宮す所をすくひ奉るべき事せんと思ひながら、物さハがしくて、ほいならぬ身のありさまにてあけくらしつゝ、「身づからのつとめにそへて、いましづかに」とハ、わがのちの世のつとめにそへて、ミやす所のつミすくひたてまつらんとおもふハ、げに心おさなき事とげんじの給ふ也。

一、よの中なべてはかなくすてまほしき事を、げんじきこえ給へど、「なをやつしにくき御身のありさまども」とは、中宮もげんじも遁世し給ひがたきと也。

一、「よべハしのびてかやすかりし」とハ、よべハ源氏の院参もかや〈11オ〉すかりしを、けさはあらハれて、上達部なども、まいり給へるかぎりハ、みな源氏の御をくりにまいり給ふ也。

一、「春宮女御の御ありさまの」とハ、あかしの女御、ならびなく源氏いつきかしづき給ふかひ〳〵も、大将の又いと人にことなる御さまをも、めやすしとおぼすに、なをこの冷泉院を源氏おもひきこえ給ふ御心ざしハ、すぐれてふかくあハれにぞおぼえさせ給ける。

一、「院もつねにいぶかしう」とハ、冷泉院もゆかしう、源氏をつねに思ひ聞えさせ給ひしに、まれの御たいめんはいぶせうのミおぼされて、かくいそがれ給て、おりゐさせ給へるに、げんじがやすく院参なきハかたミにほいなくおぼさるゝ也。「いぶせき」ハ、心もとなき也。

一、「中宮ぞ中〳〵まかで給ふ事も」とハ、六条院にいで給ふことも、〈11ウ〉たえてたゞ人の中のやうに冷泉院さしならびてつねおハしますに、いまめかしう、むかしよりも花やかに御心やれるさまながら、たゞ御息所の御ことをおぼしやりつゝ、遁世の御心すゝみたるを、人のゆるしきこえ給ふまじきことなれば、くどくの事をたてゝ、さるさまになりまさり給ふ也。「さるさまに」とハ、菩提の心ざまになりまさらせ給へると也。〈12オ〉

（日本中古文学）